

WAKUWAKUときめき専修21

“熱い大学生活”の実現目指そう

卒業生からのメッセージ — 「専修大学ですけど、なにか？」

【パネリスト】

山本理恵子さん (平18商)	鈴木 洋平さん (平18商)	小野田智美さん (平16経済)	吉田 直樹さん (平16商)	富田 純子さん (平18経営)	山崎 利彦さん (平15経済)
野村證券	トリンプ・インターナショナル・ジャパン	明治製菓	NTTデータ	住商グローバル・ロジスティクス	コマツユーティリティ

4年間をどう過ごすか

社会で活躍する若手の卒業生が、さまざまな事から取り組んだ学生時代を語り、目的意識を持って大学生活を過ごすことの大切さを後輩たちに伝える、「卒業生が語る 専修大学ですけど、なにか？」(就職課主催)が4月14日、生田キャンパスで行われた。新入生を中心に、就職活動を控えた3年次生など約40人が先輩の貴重なアドバイスに耳を傾けた。

パネリストの6人は、「4年間は何でも出来る貴重な時間。安易な方向に流されず、自分をコントロールすることが大切」、「いろいろな事を経験するのもいいが、一つのことを極めると、『就活』で強くアピール出来る」、「サークルで出会った仲間へ何度も支えられた」「キャンパス内での留学生との交流から、留学に興味を持ち、チャレンジした」など、学業・アルバイト・サークル活動・留学といったさまざまな体験から得たことを笑顔で話した。

就職課スタッフは、「入学の動機はさまざまでも、有意義に学生時代を過ごし、『専大』が大好きになって卒業していった身近な存在を示すことで、大学生活に不安を持つ新入生の指針になれば」と今回の企画の趣旨を話す。

フロアからは、「就職先を選んだ決め手は」「資格はどの程度必要か」といった質問が積極的に出され、先輩たちは丁寧に回答していた。

「『どの大学を出たか』ではなく、『4年間で何を心得て社会へ出るか』が実社会では問われる」と力強く話してくれた先輩たちの「熱い思い」は、きっと後輩たちに伝わったはずだ。

Brush UP セミナール

自信を持って語ることの出来る「熱い大学生活の実現」を目指すニュータイプのゼミ『Brush UPゼミナール』が開講されている。ディスカッションとプレゼンテーションを通して社会や企業を理解し、話し合いのプロセスの中で、自らの役割を知り、グループワークの進行などを体験しながら、自分の強みと弱みを理解することにもつながるこのゼミは、元商社の人事部長兼採用研修室長の芝原脩次氏(わくわくヒューマンカンパニー代表取締役)を講師に迎え、今年で4年目となる。



▲熱いディスカッションを通して、“本音”が見える(中央が芝原氏)

5月22日は「就活でも聞かれます！ なんのために働くのですか—我々は社会にいかに関与していくか—」がテーマ。芝原氏の「『働く目的』を明確にしておくことが、キャリア形成には大切なこと。『貢献・創造・

感動』をキーワードに自分らしい働き方を考えてほしい」という話を受け、グループごとにディスカッションした。

参加者は3年次生と1年次生が多く、学部のゼミにも入っている3年次生は「ゼミの発表もあり大変ですが、このゼミでプレゼンの力をさらにつけたい」と話し、1年次生は、「先輩の話はこれからの大学生活のヒントになります」と話した。

6月19日からはコンビニ、外食産業などからテーマを選択し、競争に勝つ戦略を考える。これからの参加も可能。問い合わせは就職課へ。

「日文専攻ネットアーカイブ2007」が完成

「源氏」から妖怪まで — ネット授業研究会の成果 第3弾

文学部の日本文学文化専攻(以下、日文専攻)のネット授業研究会メンバー20人が制作した「ネットアーカイブ」2007年版が完成した。収納されたCD-ROMはオープンキャンパスなどで受験生に配られる。メンバーは「高校生に日本の伝統文化の魅力や奥深さを伝えたい」と話している。

古代から現代までの日本の文学・文化をはじめ創作、メディア、雑誌編集、書道、中国の文学・文化など日文専攻で学ぶ分野は幅広い。それらを「学生目と技術」で紹介するのがこのネットアーカイブ。「六条院めぐり」「妖怪奇譚(きたん)」「専大マップ」の3つに分け、映像、動画、イラスト、ゲーム、占いなどを織り交ぜ多彩に展開。CD-ROMに付いている小冊子も学生たちの工夫の結晶だ。

「六条院めぐり」は『源氏物語』の面白さを多角的に紹介、「あなたは、登場人物のどのタイプ」と探る占いコーナーもある。鶴見斐香さん(4年次・板坂則子ゼミ)は「『源氏』を読んだことがない人に身近に感じてもらうことを意識した」と言う。

「妖怪奇譚」は、昔話に伝わる妖怪を登場させた迫力ある物語ゲーム。得体の知れない天狗、座敷童子、天井嘗(なめ)、鶴(ぬえ)などが次々と出没。担当した土屋卓容さん(2年次・小林恭二ゼミ)らが試行錯誤しながら完成させた労作だ。

「シナリオや各パートの統合作業に苦勞した。難しいゲーム作りだが、経験のない僕たちでも完成出来た喜びは大きい」と土屋さん。篠原葉月さん(3年次・板坂ゼミ)も「グループワークのたまものです」と話す。

「学生目で見えたものを素直に伝えたい」と上田直哉さん(2年次・柘植光彦ゼミ)らが取り組んだ「専大マップ」は文字通り、生田キャンパスの見所紹介コーナー。マップに隠されたアクセスポイントをクリックすると本学から望む見事な風景に出合う。

ネット授業研究会は、03年度から4年間展開された「国際間のネットワーク利用共同授業」(文部科学省「サイバーキャンパス整備事業」採用)に際し、パソコンの知識、操作技術の向上を目指した学生有志の会。編集・プレゼンテーション、画像・映像処理などの高度なソフト技術を学び、アーカイブの制作に挑戦。今回は3作目にあたる。

共同授業を4年間牽引(けんいん)し、同会を指導してきた板坂教授は「一連の作業を通じて創作の喜びを見だし、積み上げた論理に実践という要素が加わったことは喜ばしい」と“学び”の幅を広げた学生たちの今後に期待する。

「日文専攻ネットアーカイブ2007」は近々、専修大学文学部「日文専攻ネット授業」のインターネット上で公開される。



▲「日文専攻ネットアーカイブ2007」完成会で学生たち(3月23日、生田キャンパスで)



▲学生の工夫の結晶。CD-ROMパッケージと「妖怪奇譚」解説書

《専修人の新しい本》

今村力三郎訴訟記録第三十六巻

今村懲戒事件(一)

専修大学今村法律研究室編

言論・結社の自由もなく、普通選挙もなく、立憲制とは名ばかりの天皇制専制主義が跋扈(ばっこ)した明治の末、元老・山県有朋らの為政者はテロリストとなり、幸徳秋水らによる天皇暗殺計画共同謀議をで

っちあげた。この幸徳事件では、12人が絞首刑となる。さらに、この事件による弾圧と重罪を断罪した弁護士・今村を、法曹界から追放しようと企てる。

今回公刊された訴訟記録は、今村懲戒事件の発端となる垂水判事の忌避問題、それを口実とした今村に対する理不尽な懲戒申立に到る経緯である(専大出版局・本体4800円+税)。

編集代表 今村法律研究室長・矢澤昇治(やざわ・しょうじ)＝法学部教授。担当は国際私法ほか。



国家は僕らをまもらない

愛と自由の憲法論

田村 理著

憲法は、国家＝権力に余計なことをさせないように縛りをつけるための法律である。この憲法学の基礎の基礎は、日本国憲法が施行されて60年経ってもほとんど理解されていない。圧倒的多数の人が、憲法は、国家＝権力にまもってもらうために国民が遵守する法律だと考えている。憲法を教える者の責任は重い。著者は、立派な国家論やそれを支える哲学等を論じはしたが、生身の人間をきちんと相手にしてこなかったことが原因だと考えた。そして、本書では憲法を教える者の一人として、生身の自分が好きなものから憲法の意義を説き、読者に直感で分かってもらおうと試みている(朝日新書・本体740円+税)。

著者(たむら・おさむ)＝法学部教授。担当は憲法。



グローバル化と学校教育

嶺井 正也編著

編者は2006年、デンマークの国民学校や養護学校を訪れ、教職員や教育行政担当者と懇談し、OECDのPISA(国際教育達成度調査)への対応と移民教育が政策的、実践的課題になっていることを実感して帰国した。

現在の日本のいちばんの教育政策課題は、「学力低下論」を踏まえた「学力向上」にある。またグローバル化に伴う労働力移動に起因した日系人の子どもたちの教育問題も今後の課題となろう。本書は、ますます進むグローバル化の下、日本の教育問題はどうなるのか、どうあったらいいのかを共に考える問題提起の書である(八千代出版・本体2200円+税)。

編著者(みねい・まさや)＝経営学部教授。担当は教育行政学ほか。



